

魚島アクセントの変遷

うおしま

一 はじめに

愛媛県魚島はかつて鯛などの漁場として大いに栄えたところからその名が生まれた。それは瀬戸内の海が今のよう汚染されていなかった頃のこと、明治一八年には人口七八〇人に達したが、戦前までの朝鮮海域への出漁も止み、鯛の豊漁も去り、小規模漁業に変化した現在、若者は続々と島を出てゆく。昭和四三年には六七五人、更に昭和五三年には四三七人となり、児童数は二〇名に減少している。魚島村は魚島・高井神島・江ノ島より成り、愛媛県の今治、香川県の観音寺、広島県の尾道を結ぶ三角形の中心点よりやゝ南に位置するが、三地点のいずれよりも三〇キロ前後の距離がある。五三年当時、弓削島へは村営の定期便が四往復あり、殆どの高校生はこれを利用して弓削高校へ通学していた。また、今治へは個人経営の渡海船が一往復あったが、伊吹島を経て観音寺へという便船はない。

私 は昭和四二年十一月、五三年八月の調査で、魚島では老年層

秋 永 一 枝

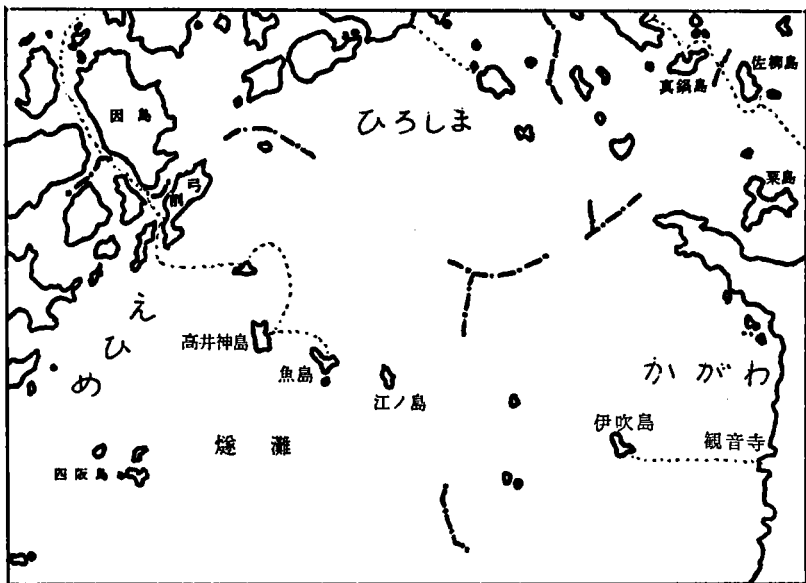
から少年層にかけて著しいアクセント体系の変化があることを確かめた。特に老年層のアクセントは微妙で聞きとりにくく、それがこのように発表を遅らせた第一の原因となった。

今回は明治三〇年（一八九七年）から昭和四二年（一九六七年）のおよそ七〇年間に出生された次の方々のアクセントから、魚島アクセントの変化を考えてみたいと思う。

発音して下さった方々は御両親・御本人とも魚島で生育された生粋の方々に、次にお名前・生年を掲げておく。また、調査に際しては(1)では山本初三郎氏（当時教育長）、佐伯増夫氏（当時助役）、(2)では佐伯真登氏（当時より教育長）に御高配頂き、まことにありがたかった。その他(2)では老人クラブの方々の発音も参考にさせて頂いた。魚島の皆様にご厚くお礼申し上げる。

(1) (42年調査) 細川市松氏（明治30年生、当時七〇才）・穴蔵為市氏（明治36年生、同六四才）・佐伯増夫氏（大正12年生、同四三才）・植田章子氏（昭和9年生、同三四才）

〔高校生〕 大西勝美氏



- (2) (53年調査) 山本初三郎氏(明治35年生、当時七七才)・金岡義一氏(明治36年生、同七六才)・佐伯真登氏(昭和7年生、同四五才)・中村一義氏(昭和24年生、同二九才。高校は四国の東予市)
- 〔中学生〕横井理文氏(昭和38年生、当時一四才)・五十嵐千里氏(昭和39年生、同一四才)・横井英明氏(同)・大林裕子氏(昭和40年生?、当時一三才)
- 〔小学生〕佐伯雅彦氏(昭和42年生、当時一一才)・山下孝徳氏(同)

二 老年層から壮年層のアクセント

別稿「愛媛県魚島における老年層のアクセント——服部・金田一両博士に伺う——」⁽²⁾で私は老年層の代表として、山本初三郎氏(略称ヤ)のアクセント体系を報告した。これをアクセント型で整理して組み直すと、(表1)上段の無印のような体系となる。それに、細川市松氏(ホ)、穴蔵為市氏(ア)のアクセントを下段に加え、老年層のアクセントの実態を示す。尚、(表3・4)には金岡義一氏(カ)の自然談話のほか、()内におとしより数名の自然談話から得たものを入れた。ここでのいう老年層のアクセントとは、明治年間に出生された方々のものが対象となる。

壮年層は大正十年頃から昭和十年頃までに出生された方々で、佐伯増夫氏(○)、佐伯真登氏(△)のアクセントを代表とする。

この世代までは、昭和二年の学制改革やテレビによる共通語

の影響を受けなかったものと思う。(表1)の下端にお二人のアクセントを加え、調査時の壮年層の代表とした。

(表2)は細川・山本・穴蔵三氏に佐伯両氏のアクセントを加え、三拍名詞のアクセントの実際の姿を示しておいた。語形の下に諸氏の略称をそれぞれ記したが、自然の会話から得たものも含まれる。

老壮年層のアクセント体系(表1)

(1) ●●○	名一(一)十助(子が・戸が・血が…)	木助詞で切ると●●、文が続くと●●の傾向。
	名二(一)十助(葉が・名が・日が…)	ア●●(…)で●●(…)は少。●●●(…)のみ。t●●で●●は稀。
(2) ●●●○	動二(一)終止(聞く・鳴る・着る・為る…)	ホア終止●●。ア○は時々、ホは稀に●●。(1)
	動二(一)四段命令(買え・死ね)	ホア●●●のようにやゝ第一拍低。(1)
(3) ●●●(●●○も)	名一(一)十助(目が・木が・火が…木に…)	ホア●●(…)かも。○は●●(…)。(2)
	名二(一)(鼻・顔・鳥・水…)	●●はアに多く ホはごく稀。 ホ言い切りの時、時に●●が出。ア単独では●●。 ●●の他に●●の出現率がホヤより多。(3)
(4) ●●(○●も)	名二(一)(川・音・橋・冬…)	ア●●の他に●●が出。●●は時々●●とも聞かれる。(4)
	名一(一)(目・木・火…)	t平ら型が多く○●は少。
(5) ●●	名二(四)(肩・舟・箸・松…)	○●●にも平ら型にも。t●●にも平ら型にも。(5)
	名二(四)(鮎・雨・秋・猿…)	t●●にも○●にも。高低差が少ない。
	動二(一)終止(書く・成る・見る・出る…)	
	動二(一)四段命令(書け・飲め)	
	形二(良い・無い)	

めてある。三拍名詞の場合は、二回・三回聞いても動かない安定したアクセント型をもつものもあれば、そうでないものもある。然し、およその傾向を示すという役にはたつてであろう。次に、それぞれの表について若干の考察を記しておく。

(8) ●○○

名一(一) (子・戸・血…)

名一(二) (葉・名・日…)

形二 (濃い)

名二(三) (貝・鯛…)

動二 (居る)

動三(一) 終止 (上がる・開ける・腫れる…)

動三(二) 命令 (上がれ・笑え)

動二(一) 四段完了 (貸した・聞いた・鳴った・死んだ…)

動二(二) 四段禁止 (買うな・死ぬな)

動二(三) 四段否定 (買わん・知らん)

名二(一) + 助 (鼻が・鳥が…)

名二(二) + 助 (川が・橋が…)

動二(一) 四段志向 (買おう・死のう)

動三(三) 終止 (歩く・隠す・はいる・参る…)

動三(三) 命令 (歩け・はいれ)

動三(二) 終止 (動く・起きる・晴れる…)

動三(二) 命令 (動け・思え)

動二(二) 四段否定 (書かん)

動二(二) 四段志向 (書こう・飲もう)

名二(三) + 助 (花が・犬が…)

ホ●●、一(一) (三) よりやゝ短。

(6)

ホ○○●●とも●●●ともとれる。●●●○○○か? (一) もあり、(二) に近付く。

○●●●とも●●●ともとれる。時に●●●も。

t●●●。

○●●●か。t●●●。

ホ○●●か。●●●●●●●●●●
○はごく稀。

ホ上記の他●●●●●●の三様。○○○
は(一)より(二)がやや多。

ア●●●●より●●●●●●の出現率がホ
やより多く、特に(二)に目立つ。(一)

ホア○●●●か?。t●●●。

ホ○○●●と○○●●●の両様。特に連体形は○○●●になりやすい。(8)

(10) ●●○○

(9) ●●●

(8) ●●○○

(●●●○も)

形三(一) (赤い・浅い…)
(二) (白い・悪い…)

(11) ●●●

動二(一) 四段完了 (差した・書いた)

「赤う(なる)・白う(なる)」も同じ。

tは多く平ら型。

動二(一) 四段禁止 (書くな・飲むな)

名二(四) + 助 (肩が・箸が…)

o●●●にも平ら型にも。

名二(五) + 助 (雨が・秋が…)

t●●●にも平ら型にも。時に助詞が下降する。

(11)' ●●●か

動二(一) 四段完了 (書いた・飲んだ・切った…)

ホ○○●「切った・成った・降った」。(9)

(12) ●○○

形三(一) (遠い) (二) (多い)

人により●○○●●●○○●●●●が出。(10)

名二(三) + 助 (貝が・鯛が…)

(表1) 注

(1) 動二(一) 終止・四段命令 tは●●●が多いが三回ずつの

発音のうち、「行け・着る(止)」に一回●●●が現れた。「買うものが・着るものが」は●●●のみで●●●はなかった。老年層の調査で「着る着物」に●●●が現れたのは、「着る・着物」と発音したためと認定した。

(2) 名二(三) + 助 tは助詞でとめると平ら型にも●●●(○

●かも) にも。文が続くと●●●となった。

(3) 名二(一) (二) oは●●●●●の両様だが○●●も。tは●●●

●。 yaは稀に●○○も。oは●●●●●の両様。t

(4) 名二(二) ●●●。

(5) 名二(四) (五) o tとも第一拍・第二拍の高さの差が少なく、単独では平らに聞こえることが多い。oは「釜」と「鎌」

をくらべると「釜」の方が、tは「橋」と「箸」をくらべると「橋」の方が、しまいが上がる感じと内省された。

(6) 「居る」はアがオルト…。oオル、tオル・オルトカだが、時にオルも。

(7) 名二(一) (二) + 助 oは○●●●●●●●の両様。文が続くと●●●が多く出る。tは助詞でとめると●●●●●だが稀に●●●●●も。ヤtとも「雉が」は○●●●●、「蟹が」は●●●●●である。真登氏の話に、「小さい子どもはカニなんて言ってますが私はカニデス。魚島のことばではガネガ・オルト…」から想像すれば、方言形「ガネ」のあるところに京

阪のカニガが進入し、アクセントも含めて老壮年層(の一部)がこれを習得したが、子どもは東京式のカニのアクセントの方をおぼえて使うようになったと言えよう。

(8) 動三(三)終止 アアルク、カクス・カクス。同命令アアルケ。oはともに○○●●・○○●●の両様。tは●●●●か●●●●か疑問。なおtは「入る・参る・入れ・参れ」とも●●●●で安定する。

(9) 動二(二)四段完了 tは「食うた・書いた・飲んだ」は平ら型、「成った」は平ら型と○○●●。

(10) 第二拍が特殊拍もしくは連母音後部成素のものは○○●●になりやすく、時に●●●●も現れる。この点、三拍名詞と同様である。tは「通る」は●●●●、「帰る」は●●●●だった。

補注

(i) 名一拍(一)(三)十二拍助詞 ホヤともに○○●●だが、ホはゆつくり発音すると○○●●のようにもなる。

(ii) 動二拍一段完了は、人により(一)が●●●●か●●●●(二)が○○●●か●●●●になることが多いが、第一拍の母音が無声化して変化することが多い。なお、「居た」は人により○○●●・○○●●○○で安定しない。

(iii) 動三拍一段完了は、人により(一)が●●●●・●●●●・○○●●の三様、(二)が○○●●と○○●●の両様で安定しない。なお「借った・借りた」はやもともに●●●●、「逃げた」はやが○○●●、tが●●●●。

I 老壮年層のアクセント体系(付表1)

老年層・壯年層のアクセント体系を一覧にして示すと、(表1)のようになる。(印刷の都合上、下段に注記ににくいものは、注及び補注として掲げておいた。)十一年おいた二回の調査で、調査語彙に若干の異なりがあるが、表示したものはすべて包含しており、別補に語例を掲げてある。尚、三拍名詞はアクセントのゆ

れが著しく、談話資料も含むことから(表2)として別に扱うこととした。

まず個人別にみてゆくと、上段に掲げた山本氏の体系が老壮年層五人の中ではいかにも整然としている。第一拍に高・中・低の三段階が聞かれたが、類の中では比較的安定しており、降り拍の出現率が高く、●●が少ない。他の四人の中では最も年令差のある佐伯真登氏(t)のアクセントが、第一拍の高さを無視すると降り拍の多い点などよく似ている。

老年層には音韻による変化型や例外的な語例を除くと、一・二拍が平らな型はみられないが、壯年層には一・二拍の高低差の少ないものが多くみられる。●●●●・●●●●とも決定しかねるところから「平ら型」としておいたが、個人差があるようだ。例えば老年層で⑤●●●●のものは、形容詞を除くと高低差が少ない。即ち名義抄で「平上」や「平東」のもの、及び「拍(三)類で室町●●●●のものは、老年層では明らかに第一拍から第二拍に上がるのに、佐伯両氏とも上がり幅が少なく、単独では増夫氏は○○●●に、真登氏は○○●●というより●●●●か●●●●に聞かれることが多い。文にすると カタイタイ、飲メデスネ、モコガキタ(響)、アキガキタ(秋)のように高まるのだが……。⑪の老年層●●●●の場合も同様で、壯年層に平ら型が現われる。これらは讃岐アクセントでは低平型になるのが殆どで、大阪方言その他にもみられる変化が語単独の場合に起ったものと言えよう。

また、名義抄の低平型は讃岐アクセントでは高平型になることが多いが、魚島では高平型をきらい他の型をとる。名詞二拍(三)類

は、山本氏は第一拍が低い○●で、(一)類の●●と區別し、更に助詞が下がることで(三)類の區別は決定的となる。但し、高松アクセントなどと同様に○●になるものや、(二)類と混同した●●・●●・○●となるものなど、個人によりいろいろである。山本氏の場合、単独では稀に●●が現れ、「色・花・耳・鬼」に○●と○●の両様が聞かれたが、助詞がつけば○●●で安定している。

一般に降り拍●は、直前が高い拍だと下り核が前に移りやすい。つまり、●●は○●になりやすいが、○●はそのままで○●になりやすく、第一拍が高くなって初めて移動が可能である。京阪式アクセントで(四)類の降り拍がよく保たれたのは、第一拍の低さによるものだろう。(4)で穴蔵氏の「馬・花・足・犬」に○●とも●●ともつかぬアクセントがよく聞かれたが、これは●●から○●に移りつつある過程であると思う。名義抄などの○●型から●●型が生まれ、それが更に●●に移るといふ変化の方向も考えられないではないが、古い○●型が一度観音寺式のように●●になるか●●・●●になるかして、そのあと第一拍が低まったととれないだろうか。

魚島アクセントでは第一拍の低まることが多い。(3)の名詞二拍(一)類も第一拍が低まって●●になったものであろう。(一)類の本来的型は●●で、それが語頭がやや低まって●●になったり、下り核が前にずれて●●になったりしたものと思う。(二)類もまた高松アクセントの変化と同じように●○V●●となり、その時点で(一)類と混同をおこし、語頭が低下して●●になったものだろう。

同様の変化は、名詞一拍(二)類+助詞が(一)類+助詞のアクセント

につられて●●にも●●にも発音されるのにもみられる。金田一春彦氏によれば土庄式アクセント(小瀬・長浜)も名詞一拍(二)類+助詞・二拍(三)類が●●型で、これらは名義抄のアクセントが「滝の後退を起こした結果でき上がったもの」とされるが、魚島の場合は更にそれに(一)類との混同という要因が加わるであろう。

このほか、山本氏に「中」●の高さではじまる(7)の●●●や(8)の●●●は、●●●や●●●の第一拍がそれぞれ低まったものだろう。(10)の形容詞三拍(一)類は●●●の第一拍が低まってきたもの。これは三拍名詞(二)・四類●●●が語頭低下して○●●になったものと付合する。

形容詞三拍(二)類が●●●から○●●になるのは語頭低下で高さの山が一拍後退したもので、三拍名詞(三)類の変化と一致する。

(5)の名詞二拍(四)類に降り拍がなくなったのは四国の諸方言に多くみられる変化だが、魚島の場合は助詞が高く平らにつく点で一般の変化と異なり、四類と同じ型になってしまう。そのすき間に(三)類の○●●●がすっぽりはまったという形になった。

(2)の名詞一拍(三)類+助詞の山本氏・真登氏の●●●は、第一拍がやや高まったもので、細川・穴蔵・増夫氏の○●●の方が本来の型ではないだろうか。名詞一拍(一)類は、細川氏の●●●が本来の型で、(一)・(二)類には●●と●●○という區別があったのではなかったらうか。

なお、助詞「も・の」は「が・に・を」と同じ接続であり、また母音の広狭もアクセントに影響を及ぼさぬため、別に表出しなかった。

三拍名詞一覽(表2) (*は二種以上のアクセントが聞かれたもの。5は五人とも同じアクセントで発音したもの。注の1を含める。)

四	(三)	(二)	(一)	語類		型
				a	b	
鉄 ^{*t}		小豆 ^t ・毛拔 ^t ・ つるべ ^t ・とか げ ^t ・夕 ^t		鱗 ^t ・霞 ^t ・形 ^t ・ 着物 ⁵ ・鎖 ^t ・煙 ^t ・ 子供 ^o ・桜 ^o ・ しるし ^t ・舅 ^t ・ 隣 ^t ・柳 ^o	○○○ ○○○ ▽	a
ずら ^t ・鏡 ^o ・秤 ^t	・岬 ^t	黄金 ^t ・小麦 ^t ・ 力 ^o ・はたち ^o ・ 力 ^o ・はたち ^o ・ 力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	小豆 ^o ・毛拔 ^o ・ 小豆 ^o ・毛拔 ^o ・ 小豆 ^o ・毛拔 ^o ・ 間 ^t ・女 ^t ・毛拔 ^o ・ 二つ ^o ・女 ^t	鱗 ^t ・霞 ^t ・形 ^t ・ 着物 ⁵ ・鎖 ^t ・煙 ^t ・ 子供 ^o ・桜 ^o ・ しるし ^t ・舅 ^t ・ 隣 ^t ・柳 ^o	○○○ ○○○ ▽	b
頭 ^o ・いくさ ^t ・東 ^t		力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	小豆 ^o ・毛拔 ^o ・ 間 ^t ・女 ^t ・毛拔 ^o ・ 二つ ^o ・女 ^t	鱗 ^t ・霞 ^t ・形 ^t ・ 着物 ⁵ ・鎖 ^t ・煙 ^t ・ 子供 ^o ・桜 ^o ・ しるし ^t ・舅 ^t ・ 隣 ^t ・柳 ^o	○○○ ○○○ ▽	c
鏡 ^o ・かしら ^t ・かたぎ ^t ・ 刀 ^t ・言葉 ^t ・境 ⁵ ・つる	・岬 ^t	力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	間 ^t ・女 ^t ・毛拔 ^o ・ 二つ ^o ・女 ^t	鱗 ^t ・霞 ^t ・形 ^t ・ 着物 ⁵ ・鎖 ^t ・煙 ^t ・ 子供 ^o ・桜 ^o ・ しるし ^t ・舅 ^t ・ 隣 ^t ・柳 ^o	○○○ ○○○ ▽	(10)
扇 ^t ・鏡 ^o		力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	女 ^t	氷 ^t ・ 氷 ^t ・舅 ^t	○○○ ○○○ ▽	a
仏 ^t		力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	女 ^t	氷 ^t ・舅 ^t	○○○ ○○○ ▽	b
鉄 ^o ・東 ^t		力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	とかげ ^t ・二 ^t ・ つ ^o ・二 ^t ・ つ ^o ・二 ^t ・ つ ^o ・二 ^t ・	鎖 ^t	○○○ ○○○ ▽	(11)
		力 ^o ・はたち ^o ・ さざえ ⁵ ・力 ^o ・ はたち ^o ・ さざえ ⁵	二 ^t ・ 二 ^t ・ 二 ^t ・		○○○ ○○○ ▽	(13)

(X)	(七)	(六)	(五)	
	苺 ^t ・うしろ ^t ・ 兜 ^ヤ ・鯨 ^t ・菓 ^t ・ ・たらい ^t ・鳥 ^t	雀 ^ヤ ・鼠 ^t ・ ぱり ^t ・蓬 ^t		
おなごヤ	苺 ^ヤ ・うしろ ^ヤ ・ 兜 ^ホ ・菓 ^ホ ・ 菜 ⁵ ・便り ^t ・ い ^ヤ ・椿 ^ア ・野原 ^ヤ	鳥 ⁵ ・雀 ^ホ ・ 鼠 ^ホ ・蓬 ^ヤ	油 ⁰ ・錦 ^ヤ ・柱 ⁵	
おやじヤ		(6)		
えくぼ ^ア ・おなご ^ホ ・ じ ^ア ・扉 ^ア ・二万 ^ヤ ・ 向う ^ア 用 ^ヤ ・漁師 ^ヤ	兜 ⁰ ・菓 ⁰ ・野原 ^ア ・ 一つ ^蚕	雀 ^ア ・背 ^ホ 中 ^ヤ ・鼠 ⁰	朝日 ^ア ・油 ^ホ ・ 命 ⁵ ・心 ⁵ ・ざくろ ^ア ・ 涙 ⁵ ・錦 ^t ・火箸 ^ヤ ・ こヤ	ぎ ^ヤ ・袴 ^ヤ ・光 ^ヤ ・ ヤ・席 ^ヤ
おとな ^t ・手	蚕 ^t	(6)	命 ^ア ・鱗 ^ヤ ・ 姿 ^ホ 胡瓜 ^ア ・ 火箸 ^ア	袋 ^ヤ ・ 仏 ⁰
紙 ^ア ・平目 ^ヤ ・ 鮪 ^ア ・胸毛 ^ヤ ・ ラッパ ^t	便り ^ヤ ・野原 ^ホ	兎 ^ホ ・蛙 ^ア ・ 狐 ^ヤ ・雀 ⁰ ・ ぱり ^ヤ ・真 ^ヤ	高 ^サ さ ^ヤ ・ こア	まな
		操 ^t	兎 ^ア	

(表2) 注

(1) 佐伯真登氏は(10)の○○●○以外はすべて第一拍を高く発音する。即ち(9)aは●●●・●●●●、(11)は高平型のようになるが、繁雑さをさけて第一拍の低いグループに入れてある。

(2) 「ヴァ」は●●○○のように聞かれた。(12)にすべきかもしれない。

(3) 「さざえア」は●●○○のように聞かれた。(b)にすべきかもしれない。

(4) 山本氏は「頭・鏡・かたき」を単独では殆ど○○●○に、助詞「が」でとめると○○●○○と○○●●●の両様に、文が続くとやや後者を多めに発音された。

(5) 「きゅうり」を穴蔵氏は単独で●●●●のように、山本氏は助詞がつくと●●●●のように発音された。

(6) 「雀ア」は単独で○○●●、助詞がつくと○○●●○○となった。

II 三拍名詞のアクセント(付表2)

老年層・壮年層の三拍名詞の実相を一覧にして示すと(表2)のようになる。個人による偏りもあり、また一個人でも二回、三回と聞くうちにアクセントのゆれることもあって安定しないが、全般的に次のような傾向があるといえよう。

(1) (9)aはいかにも助詞が接続しているという感じで複合がゆるそうである。真登氏(t)にこれが多いが、談話の際は助詞の下降が消えてゆく傾向にあることからそれが伺われる。

(2) (9)b cと(10)は同一話者でも両型発音することが多く、そのアクセントが異なっているという意識が乏しい。一般に、名詞単

独で○○●●のもの、一拍助詞がついて○○●●○○のものが○○●○に変化する傾向がある。

(3) 一般的に語頭低下の傾向があるが、これには多少個人差があると思われる。

(4) ○●●○が多数形で、他の型から類推によって変化することが多く、所属語彙をふやしつつある。

(5) 特殊拍だけを高めることは避ける傾向があり、第二拍が特殊拍の場合は、○○●●か●●●●に変化する。

以上の傾向をふまえて変化の様相を類ごとに考察してみる。

(一)類は語頭が低下して○○○○/○○○○/○○○○となった。また助詞の複合の度合も強まり、a V b へ変化し、○○○○/○○○○から名詞単独でも語末が下降しないc○○○○も生まれた。更に○○○○/○○○○からは多数形(10)の○○○○に変化することが多い。

(二)類・(四)類は○○○○の語頭が低下して(10)の○○○○ができた。第二拍が特殊拍でないのに(9)bが比較的(特に(二)類に)多いのは、(9)(10)両型でアクセントが異なるという意識が少ないために両型の間でゆれていると考える。(三)類・(五)類は高さの山が一拍うしろにすべったもの。○○○○が少数みられるのは、本来の型が残ったといふべきか。(六)類は(11)の○○○○/○○○○/○○○○がまだ比較的安定しているが、まず(9)と混同し、次いで(10)が類推により生まれた。(七)類に多数形の○○○○が少ないことが不審である。老年層で第二拍狭母音のものが多少(9)に多いことは言えそうだが、自然談話ではどうなるか、更に調査したい。

III 四拍語・五拍語のアクセント (付表3・表4)

参考として(表3・表4)に四拍体言・五拍体言のアクセントの実相を掲げておいた。穴蔵氏(ア)以外は自然談話からとったもので、調査という形をとればまた多少異なった結果が出るかもしれない。自然談話を主としたため、助詞が高く接続するか(例、オカガミモ)、低く接続するか(例、アメコチガ)の区別は注記

四拍体言のアクセント(表3)

- (1) a ○ ● ● ● ●
 b ● ● ● ● ●
 c ○ ○ ● ● ●
- (2) a ○ ● ● ● ●
 b ● ● ● ● ●
 c ○ ○ ● ● ●
- (3) a ○ ● ● ● ●
 b ● ● ● ● ●
 c ○ ○ ● ● ●
- (4) b ● ● ● ● ●
 ○ ○ ● ● ●
 ○ ○ ● ● ●

しなかった。
 表中、*は異なったアクセント型の現れたもの。bcは第二拍が特殊拍のもので、aの変種と考えた。くわしくは稿を改めた。

ヤくどさん(かまど)・沢山・平釜、カ赤土・あめこち雨東風・お鏡・こち風・しと四斗俵・満ち潮・麦ぬか、ち弓削校、(お供え・お旅所・お祭・黒いか・大正・初物)

ヤ朝鮮(の)・人間、(金比羅さん)・真言・新宅・大正・だんじり)

ヤ学校、(学校)

ア楠の木・唇・盃・魂・貰い子、ヤ金持ち、カ十一、(お前ら・千円)

ヤ先生・四万、ち先日(は)、(ぎょうさん・金比羅さん)・さんかじ三箇寺・さんかじ三軒・三人・小便・朝鮮)

ヤ沢山(は)、カ百姓、(一箇寺・百たば)

ア妹・ガラス戸・果物・神戸市・自転車・たちばな・多度津市・乳呑子・手拭・手袋・なでしこ・迷い子・麦わら・紫、ち細川(姓)・さんかじ金岡(姓)

ヤ秋口・おだやか・なな鯛網・七十、カ二円・一月・一枚・売り買い・おだやか・御主人・米糠・下げ潮・ひとあみ・分限者

(穴蔵(姓)・いか籠・磯だて・魚島・さんかじ金岡・さんかじ黒いか・さんかじ黒島・小泉(姓)・ここのつ・さしあみ・七代・篠塚(さん)・住吉(さん)・高虎(名)・長持・七代・八幡(さん)・飛行機・細川・枿あみ・間違い・さんかじ宮島(さん)・村上(さん)・目の前・森山(姓)・六月)

ち朝鮮

ヤ商売、カ大口(魚)・奥さん・極々・女房、ち結構(です)・ずいぶん、(大阪・大西(姓)・神さん・兄弟・金

(5) ○○○●
○○○○▼
類・九州・荒神(さん)・三本・正面・朝鮮^{*}・八幡(さん)^{*}・宮島(さん)^{*}・四代^{たん}
ア鶏・蛤、(てんてこ)≡踊)

五拍体言のアクセント(表4)

(1) a ○●●●●
ア赤とんぼ・お客様^{*}・ねずみ色^{*}・表島、ヤおくとさん・しばりあみ、カ旦那さん、(鱒あみ・お正月・お宮さ

b ●●●●●
ん・五輪塔^{*}・五六代^{*}・五六本
(終戦後・戦時中・迷信家)

(2) a ○●●●●
ア油紙・柏餅・兜虫・ガラス窓・卵焼・俄雨・丸亀市

b ●●●●●
(道福寺)

(3) a ○●●●●
アお伊勢さん・生卵・不しあわせ・水油、力愛媛県・香川県、(伊賀守・聞き伝え・高井神^{たか}・前仕事)

b ●●●●●
ア小豆島、(大三島)

(4) ○●●●●
ア乳母車・お母さん・お月様・お月さん・落し物・鬼が島・お日いさん・金だらい・さつま辛^{*}・女学生・宝

船・針仕事・物語、^tお嬢さん・御丁寧、(お父ちゃん・おばあさん・春日^{かすが}さん・五本松^{*}・五六代^{*}・二十本・

仏さん)

(5) ●○○○○
(春日^{かすが}さん・小山君^{こやま}・十五日^{ごじふ}・鯛奉行)

(6) ○○○●●
アお客様^{*}・ねずみ色

(○○○○○▼)

四拍動詞は若干の例外を除き、(一)類が○●●●●、(二)類が○○○○であった。完了形や二・三拍動詞の派生形も含めて

一覧にすると左のようになる。(なお、真登氏は高くはじまるこ
とがあるが、表2同様下がり目に重点をおきその位置に送った。)

○○●●●●

四拍(一)類 生まれる・働く・忘れる (5)

二拍(一)類 生まれた・忘れた ヤ t
(釣りよる)(知るとる ○○○●●)

二拍(二)類 ●●●●●
二拍(一)類 ●●●●●
聞きとる アヤ、炊いとる ヤ

○○●●●●

四拍(二)類 答える・倒れる・流れる・離れる (5)

三拍・四拍(二)類 動いた・落した・答えた・離れた

二拍・三拍(二)類 晴れとる・吹かれる 木

●●●
三拍(三)類 歩いた・はいった ヤt (tは「入った」
に○○●●●も)

右のほか、「(男に)振られる」に○○●●○t、「(雨に)降られる」ヤt・「(犬に)噛まれる」ヤに●●○○○が現れた。後者の方は平安・鎌倉がフル・フルル、室町フルルで変化にあらうとしても、前者は●●○○か、語頭低下で○○●●○になりそうなものである。また「答える」ホヤに○○●●○が現れた。なお、検討したい。

四拍形容詞は高起式・低起式が人により相違するが、下がりめだけに注目すれば「危い・悲しい」が③、「大きい・かわいい・涼しい・めんどい」が②であった。一般に第二拍が特殊拍のものは、「大きい・小さい」「無うなる・良うなる・濃うなる」に①の人が多いが、「大けえ・めんどい・無うなる・良うなる・濃うなる」など、真登氏はすべて●●○○である点、名詞の傾向と一致する。

三 若年層のアクセント

別稿にも記したように、若年層は個人差がはげしい。高校以上の年齢になると、北の弓削高校に行く人や南の四国の高校に行く人などまちまちである。弓削は東京式アクセントであるからその

影響を受けるのは当然であるが、高校からではすっかり東京式になるのはむずかしいようだ。然し、魚島の中学生が魚島アクセントの影響を受けながらも東京式アクセントに近い発音であったのは驚いた。いかにテレビ・ラジオの影響が強いか、ということである。

次に、若年層一般の傾向を簡単に記しておく。ここでは○○○△・○○○△・○○○△など、どこから上がるかなどの差は示さず、もっぱらアクセントの下がり目があるかないか、あれば何拍めにあるかに重点をおいて数字で記述することにした。なお、降り拍は植田氏・中村氏に少し、大西さんに稀にみられるのみであった。以下に中学生六名のアクセントを報告する。

一般に名詞・動詞を通じて同音語のアクセントは混同しやすい。特に一拍語にそれが目だつ。一拍名詞は老壮年層の(一)(二)類の①や、弓削アクセントの(二)類の①が影響して東京式の①と同様となり、(三)類は①が影響して東京式の①と同様となり、類の区別が殆どなくなった。全体的には①の方が多数形である。

「二拍名詞十一拍助詞」は、中学生では左のようになる。これは、類別に約十語ずつを「名詞十助詞」の形ででき、内三語ずつを名詞単独及び文の形にして発音してもらったもので、多数形を先に記し、二例以下を注とした。(なお、東京式アクセントと同じものには傍線をひいておく。)

- (一)類 ①(六名)
(二)類 ②①(四名)、②(二名)
(三)類 ②①(五名)、②①(一名)、(神(四名)、貝(五名)が①)

四類 ①(四名)、②③(二名)、④(一名)

五類 ①②(一名)、③④(二名)、⑤⑥(二名)、⑦⑧(一名)、⑨(一名)

四の①(四名)のうち、「空」①(二名)②(一名)、「糸」①(二名)、「松」②(二名)があった。また、名詞・動詞を通じてもっとも東京式アクセントに近かった山下さんが、「糸・麦」を①に、「稲」を②に発音した。ちなみに弓削二名の同一語彙の調査では、広島アクセントと同じく「糸」が①であった。

老壮年層では四(五)類とも①であるのに、少年層が四類に①が多く、(五)類に①が多い理由が不審であるが、(五)類の調査語彙に少年層の多用する語が四類にくらべ多少多かったのが一因かもしれない。三拍名詞については省略する。

二拍動詞もまた(一)類が混同することが多いが、三拍(一)類は活用形を含めて比較的東京アクセントと同じで、これは魚島アクセントからみても当然なことである。(三)類は魚島アクセントの影響が強く、「はいる」が①(七名)②(三名)、「隠す」が①(七名)②(三名)、「歩く」が①②ともに(五名)であった。(計十名となるのは完了形を含めた実数であるため)

二拍形容詞はすべて①、三拍は魚島アクセントと同じ②であった。

この少年層が弓削の高校に通学すれば、二拍名詞(四)類の頭高化は容易で、恐らく近い将来、伝統的な魚島アクセントは東京式アクセントにとって変えられる運命にあると思われる。

四 おわりに

二IⅡで既に述べてきたが、一時代前の魚島では一拍名詞の(一)類は●●、(二)類は●○、(三)類は○●だったと思われる。また、名詞二拍・三拍、動詞三拍、形容詞三拍のそれぞれ(一)類の語頭の●は、一時代前は●であったろう。二拍・三拍(一)類の語末の下降が問題ではあるが、二拍名詞(一)類の語頭が●で、(二)類が○●V●●V●●の変化を経たとすれば、一時代前は 1/2/3/4/5の類の統合となる。この形は徳川宗賢氏が第二次アクセントとして推定された「(X)葵」にあたり、現実には存在しない、⁽¹⁰⁾そうである。弓削を含む広島アクセント「1/2/3/4/5」も、現在の魚島アクセント「1/2/3/4/5」も、この「1/2/3/4/5」から「1/2/3/4/5」から「1/2/3/4/5」への統合はそれほど古い時代とは思われない。恐らく明治三十年生まれの細川氏の親の時代あたりではなかったろうか。更に想像をたくましくして、(四)類が四類から枝分れた説にたてば、一時代前の魚島アクセントこそ第一次アクセントで、伊吹島アクセントはそこから枝分れた第二次アクセントであるということも可能かもしれない。⁽¹¹⁾

一つ疑問なのは、(三)類の「皮・玉」が○●型(助詞がつけば○●●)で、京阪式アクセントと同じく四類に合流するが、伊吹島もまた「麻・穴・皮・玉」(すべて(三)類)が四類に統合される。ところが「皮・玉」は「平家正節」⁽¹³⁾「近松浄瑠璃本」⁽¹⁴⁾で●○であり

「稿本あゆひ抄」の写真でも「玉」には●○の指示がある。これは京阪アクセントでは○●○●○に変化したあとで○●●となつたとされている。魚島や伊吹島などでも、良いことばである京阪のアクセントとの違いに気付いた人が、「皮・玉」などの京阪アクセントを習得し、それがだんだん広まっていたものだろう。

最後に魚島アクセントの語末の降り拍について一言述べたい。

●は、高い拍に続く場合は個人によるゆれがあつて長期間持続しうるものとは思えないので、高平型の変化によるものと考ええる。

高平型は語末・文節末の切れめを示差する上であまり機能的ではない。東京式アクセントは、高平型の語頭を低めることでそこが文節の初めであることを示差することが可能となつた。この統合的機能を有坂秀世氏は「統成的機能」⁽¹⁵⁾とされている。高平型の末尾が下降することは、もはや音韻的に安定した東京式の語頭低下と同じような統合的機能のあらわれで、多くの場合音声的な自然下降にとどまる点で(9)類の○●型の降り拍とは異なるものと考ええる。私などは近視眼的で想像力に乏しく「奈良時代よりも少なくとも数世紀古い時代」の日本語のアクセントを再構するなど、とてもその任ではないが、京阪式アクセントで高平型に対する祖語のアクセントに一種の下降型があつたにしても、それは多くの場合「型」として固定したものではなかつたと考えている。なお、「高井神島アクセントの変遷」については紙数の関係上稿を改める。

(本稿のキーワード。魚島アクセント・アクセントの変遷・語末の降り拍・語頭低下・第一次アクセント)

注(1) 「村勢要覧 うおしま」(昭和五三年六月発行)による。

(2) 「月刊 言語」(昭和六一年七月)

(3) 宮本常一博士とお年寄の対談記録(五二年五月)の録音を拝借することができた。他に、老人クラブでの談話資料も加えてある。

(4) (i) 王井節子「香川県のアクセント」(国語研究二〇〇)、(ii) 金田一春彦「讃岐アクセント変異成立考」(国語研究二二・二二)。「日本の方言」に収載。

(5) 榎垣実「大阪方言アクセント変化の傾向」(近畿方言双書 六)など。

(6) 稲垣正幸「高松アクセントの音相」(国語学論考15 16 補訂合冊版 (10) へ)

(7) (4)の(ii)「日本の方言」194 へ。

(8) 調査語彙は、和田実「複雑なアクセント体系の解釈」(国語学32)を参照した。

(9) 弓削島は下弓削で生育された左のお二人のアクセントによつた。

中辻鹿野子氏(明治生れ)、山本和歌子氏(明治四四年生れ、当時五六歳)

(10) 「言葉・西と東」(日本語の世界) 233 へなど。

(11) こうした考え方については徳川宗賢氏(注10)の282 へにも言及がある。

(12) 上野善道「香川県伊吹島方言のアクセント」(日本学士院紀要四〇ノ二)及び秋永の調査による。

(13) 奥村清恵「平家正節語彙索引」による。但し「麻」は○●。

(14) 坂本清恵「近松浄瑠璃本の胡麻章付き語彙索引」(アクセント史資料索引五)の礎稿による。

(15) 「音韻論」(増補版では118 へ)

(16) 服部四郎「日本語諸方言のアクセントの研究と比較方法」(月刊 言語 昭和六〇年九月)